

フェルガナ盆地のムジャッディディーヤ ——ムジャッディディーヤ科研ウズベキスタン調査報告——

川本 正知、河原 弥生、和崎 聖日（共同発表）

1. ムジャッディディーヤ科研におけるウズベキスタン調査の位置づけ（川本）

1. 中央アジアにおけるナクシュバンディー教団とムジャッディディーヤ

ナクシュバンディー教団は中央アジアのブハラのパハー・ウッディーン・ナクシュバンド（1318～1389）を名祖とするスーフィー教団である。15世紀のサマルカンドに現れた通称ホージャ・アフラルことナーシル・ウッディーン・ウバイド・アッラー（1404～1490）の弟子たちによって16世紀には中央アジアからオスマン朝治下のアナトリア、ムガル朝治下のインド、東トルキスタンへと伝搬していった。東トルキスタンのカシュガル・ホージャ家は、ホージャ・アフラルの孫弟子のマフドゥーミ・アアザムと称されるマウラーナー・ホージャギー・カーサーニーの東トルキスタンに移住した子孫たちである。

ホージャ・アフラルから下って5代目の弟子とされるのがデリーのホージャ・アフマド・シルヒンディー Khwāja Aḥmad Sirhindī（1564～1624）である。彼は「ヒジュラ暦2千年期の革新者 (Mujaddid-i alf-i thānī)」と呼ばれ、彼の息子たちを含む弟子たち・後継者たちの率いたムジャッディディーヤ Mujaddidiyya(革新者たち)と総称される多くの教団は、イスラム改革思想・改革運動として17世紀以降の各地域のイスラム社会に大きな影響を与えたとされ、17世紀以降のナクシュバンディー教団の分派はそのほとんどがムジャッディディーヤであると言ってもよい。ダケスタンのイマーム・シャーミルなどオスマン朝治下の各地で列強の支配に頑強な抵抗を繰り広げたハーリディーヤ Khālidiyya の始祖であるマウラーナー・ハーリド・バグダーディー Maulānā Khālīd Baghdādī（1776～1827）、イスラム改革思想で知られるインドのシャー・ワリー・アッラー Shāh Walī Allāh（1703～1762）はムジャッディディーヤに属するシャイフたちである。

ムジャッディディーヤは早い段階でナクシュバンディー教団発祥の地である中央アジアにも伝搬した。シルヒンディーの3番目の息子であるムハンマド・マアスム Muhammad Ma'sūm (d.1668) にインドにおいて師事したホージャ・ハビーブ・アッラー Khwāja Ḥabīb

Allāh (d.1699/1700) が中央アジアにあらわれた最初のムジャッディディーヤであり、17世紀後半のブハラに大きな影響を与えた。

2. アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究

現在(2016年3月)まで、日本学術振興会の平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(海外学術調査)「研究課題名 アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究(課題番号 25300023)」)によって7度の写本調査・収集および現存するナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤ教団の調査が行われた。そのうちの昨年度までに行われた5度の調査については2014年度中央アジア学会年次総会にて報告した。その後当発表までの一年間に二度の調査が行われた。

2015年度の調査

- 1) 2015年8月イラン調査(2015年11月27日京都大学人文科学研究所研究班「イスラムの東・中華の西—前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相」にて報告)
クルディスタン教団調査(サナンダジュ、マリーバーン、マハーバード)
テヘラン写本調査・収集
- 2) 2015年9月第二回ウズベキスタン調査

当研究発表では2014年9月に行われた第一回ウズベキスタン調査の成果を含めて第二回ウズベキスタン調査の報告をおこなう。

3. ムジャッディディーヤ科研第二回ウズベキスタン調査(2015年9月1日~26日)

参加メンバーは報告者川本、和崎のほか現地研究協力者としてアドハム・アシロフ博士(ウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史学研究所教授)が加わり以下の日程でフェルガナ盆地のナマンガン、カッタ・ケナガス村(コーカンド近郊)を訪ね、主にマジズーブ・ナマンガニー‘Abd al-‘Azīz Majdhūb Namangānī (d.1856/57)の教団および彼の弟子たちの教団を調査した。8日以降タシケント国立東洋学大学東洋写本センターにてムジャッディディーヤに関する写本調査をおこなった。

9月1日 日本→タシケント(川本、和崎)

2日 タシケント

- ①ウズベキスタン共和国科学アカデミー文学博物館研究員ジュラボエフ氏より情報収集
- ②マジズーブ・ナマンガニー7代目の子孫アフマド・ムハンマド氏にインタビュー

- 3日 タシュケント→ナマンガン
- 4日 ナマンガン
- ①マジュズーブ・ナマンガーニー廟訪問
 - ②アターウッラーフ・ハーン・トラ（マジュズーブ・ナマンガーニーの孫）の5代目の子孫の同名のアターウッラーフ・ハーン・ママジョノフ氏にインタビュー
- 5日 ナマンガン
- アフマド・ムハンマド氏の妹の夫の兄ダウトハーン氏宅訪問、インタビュー
- 6日 カッタ・ケナガス村
- ①アク・コルガン村（ブヴァイダ地区）のイブラーヒーム師の建てたサルマンギト・モスク訪問
 - ②カッタ・ケナガス村のハズィーニー記念館訪問
 - ③ハズィーニー廟訪問
 - ④ハズィーニーの邸宅訪問、彼の子孫たちにインタビュー
- 7日 ナマンガン→タシュケント
- 8日～24日 タシケント国立東洋学大学東洋写本センター写本閲覧
- 15日 タシュケント→日本（和崎）
- 25日 タシュケント→日本（川本）

II. 現代ウズベキスタンのスーフィズムとスーフィー教団：ナクシュバンディー教団、ヤサヴィー教団、カーディリー教団（和崎）

本報告の目的は、主に第2次世界大戦期から現在に至るまでのウズベキスタンを対象として、スーフィズムに関連する儀礼の実施状況とスーフィー教団の活動実態の一端を、先行研究と自らの調査資料（映像資料を含む）に基づいて、明らかにすることであった。

第2次世界大戦期以降の中央アジアでは、政府の許容する範囲内で信仰の自由が認められるようになったが⁽¹⁾、スーフィズムに関連する儀礼やスーフィー教団の活動はゴルバチョフのペレストロイカ後期まで公式には認められなかった⁽²⁾。なぜなら、反ロシアおよび反ソヴ

⁽¹⁾ 帯谷知可「中央アジアにおけるスーフィズム―バスマチ運動とタリーカー」原暉之・山内昌之『スラヴの民族(2) 講座スラヴの世界2』東京：弘文堂、1995: 232-249。

⁽²⁾ Бабаджанов, Бахтияр. Возрождение деятельности суфийских братств в Узбекистане //

イエトの民衆蜂起を先導した中心的な存在であるスーフィー導師の存在が政府にとって最大の潜在的脅威であったからである⁽³⁾。1943年に設立された政府のいわば「御用機関」である、中央アジアおよびカザフスタン・ムスリム宗務局は、伝統的なハナフィー法学派が（論争を含みながらも）歴史的に許容してきたスーフィズムに関連する儀礼とスーフィー教団の活動を、ハンバリー法学派やサラフィー主義の学説を援用したファトワーや命令書を発行することによって、シャリーアに反する逸脱的な行為として断罪した⁽⁴⁾。このことによって、スーフィズムに関連する儀礼とスーフィー教団の活動は警察権力によって「正当」に取り締まられるようになったと考えられる。ただ、それらは、周知のとおり、ソ連時代をとおして非常に大きく抑圧されたが、完全に根絶されることはなかった⁽⁵⁾。

スーフィズムに関連する儀礼とスーフィー教団の活動は、概して、1991年の独立後、ウズベキスタン政府が新たなナショナル・アイデンティティーを模索するなかで「金の遺産」として高く評価され、社会の表舞台に再び姿を見せるようになった⁽⁶⁾。しかし、その対象は徐々に過去のスーフィー文学や聖者廟に限定されるようになり、1990年代後半からは、日常の社会生活のなかで実際になされるスーフィズムに関連する儀礼とスーフィー教団の活動はウズベキスタン・ムスリム宗務局のファトワーなどをとおして再び取り締まられるようになった⁽⁷⁾。その取り締まりは年々厳しさを増した。2007–2009年にイブラーヒム・ママトクロフ（1937–2009）やアディル・ハーン・サリモフ（1928–2009）、グラーム・アタ・ナールマトフ（1916–2007/2008?）など、高名なスーフィー導師が次々に他界したのと期を一にして、スーフィズムに関連する儀礼とスーフィー教団の活動は社会の表舞台から再び姿を消した⁽⁸⁾。その理由については、ここでは字数の関係から割愛するが、こうした状況が現在も継

http://www.ca-c.org/journal/cac-02-1999/st_22_babajanov.shtml, 2001a (2015年11月28日閲覧)。

⁽³⁾ Benningsen, Alexandre and Chantal Lemerrier-Quelquejay. “L’« islam parallèle » en Union Soviétique : Les Organisations Soufies dans la République Tchétchéno- ingouche,” *Cahier du Monde Russe et Soviétique*, 21(1), 1980: 49–63.

⁽⁴⁾ Бабаджанов, Бахтияр. О фетвах САДУМ против «неисламских» обычаев // Ислам в Центральной Азии. Взгляд изнутри. Аналитическая серия Московского отд. Фонда Карнеги, вып. 6. Ред.: М.Б. Олкотт, А. Малашенко. Москва, Московский центр Карнеги, 2001: 65–78.

⁽⁵⁾ 例えば、小松久男「タシュケントのイシャーニについて」『イスラム世界』23–24、1985: 69–90; 帯谷知可、同上、1995; Sultanova, Razia. “Yassavi Zikr in Twenty-First Century Central Asia: Sound, Place and Authenticity,” *Performing Islam*, 1(1), Intellect Ltd Forum, 2012: 129–151; Бабаджанов, Бахтияр. Возрождение деятельности суфийских братств в Узбекистане. など。

⁽⁶⁾ Бабаджанов, Бахтияр. Возрождение деятельности суфийских братств в Узбекистане.

⁽⁷⁾ Бабаджанов, Бахтияр. О фетвах САДУМ против «неисламских» обычаев.

⁽⁸⁾ Wazaki, Seika. “*Jahri Zikr* as Practiced by Women in Post-Soviet Uzbekistan: The Survival of a Sufi Traditional Ritual through the Soviet Period and Its Uncertain Future,” Chika Obiya (ed.), *Islam and Gender in Central Asia*:

続していることを最後に指摘した。

III. ムジャッディディーヤのフェルガナ盆地への伝搬⁽⁹⁾ (河原：当科学研究費研究分担者)

17世紀にインドに興ったナクシュバンディー教団の改革派ムジャッディディーヤの教義は、同世紀末には中央アジアの中心であるマンギト朝ブハラ・アミール国に伝わった。インドにおけるムジャッディディーヤは早い段階で、ホージャ・アフマド・スィルヒンディー (d. 1624) の二人の息子、ムハンマド・マアスームの派と、ムハンマド・サイードの派に分裂していた。先行研究からは、ブハラへは、前者はハーッジー・ハビーブ・アッラーにより、後者はサマルカンド郊外のダフベード村を拠点とした指導者ムーサー・ハーン・ダフベードィー (d. 1776) により伝えられたこと、また君主アミール・ハイダル (r. 1800–1826) の入門以降、後者が優勢になったことが明らかになっている⁽¹⁰⁾。

報告者は近年、フェルガナ盆地においてムジャッディディーヤの道統を示す7点の免許状と1点の道統書を発見した。免許状は指導者が弟子に修行修了を認めたものであり、道統書は自らの道統を図にしたものであるが、いずれも教義の伝搬の系譜を示している点では共通している。本報告では、これら8点を史料としてムジャッディディーヤのフェルガナ盆地への伝搬の過程を分析した。

これら8点はすべてダフベード派の道統を表しており、系譜のムーサー・ハーン・ダフベードィーまでの部分は、互いにはほぼ一致する。興味深いのは、8点すべてが、ムーサー・ハーンの孫弟子、ハリーファ・ムハンマド・フサイン (d. 1833/34) を通じている点である (図

Soviet Modernization and Today's Society (CIAS Discussion Paper No. 63), Kyoto, CIAS, Kyoto University, 2016: 50–66.

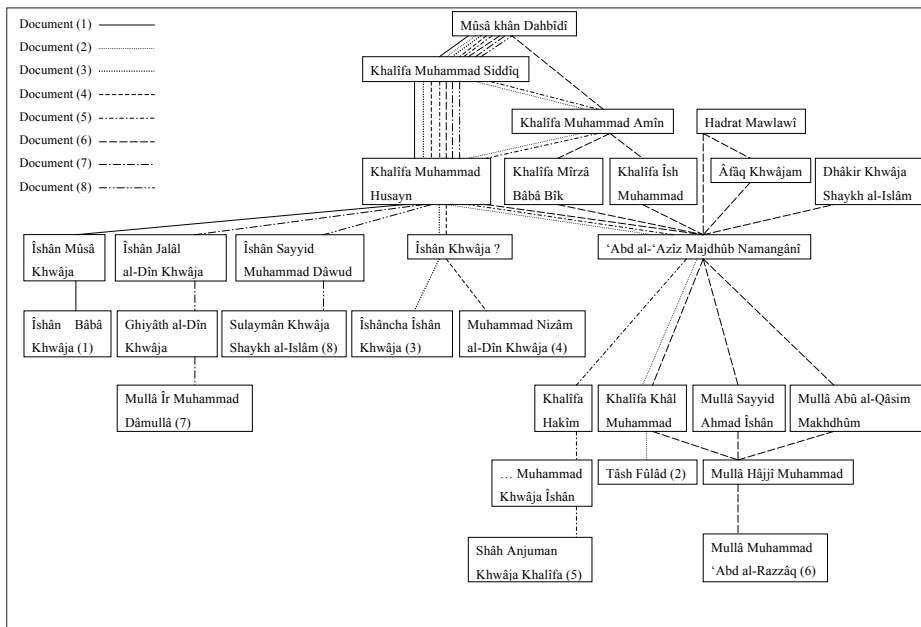
⁽⁹⁾ 本報告の内容はすでに論文として発表している。Kawahara, Yayoi. “The Development of the Naqshbandiyya-Mujaddidiyya in the Ferghana Valley During the 19th and Early 20th Centuries,” *Journal of the History of Sufism*, 6, 2015: 139–186.

⁽¹⁰⁾ Baxtiyor Babadzanov. “On the History of the Naqshbandiyya Muğaddidiyya in Central Māwarā’annahr in the Late 18th and Early 19th Centuries,” *Muslim Culture in Russia and Central Asia from the 18th to the Early 20th Centuries*, ed. by Michael Kemper, Anke von Kügelgen and Dmitriy Yermakov (Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1996): 385–413; Anke von Kügelgen. “Die Entfaltung der Naqshbandiyya Muğaddidiyya im mittleren Transoxanien vom 18. bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts: Ein Stück Detektivarbeit,” *Muslim Culture in Russia and Central Asia from the 18th to the Early 20th Centuries*, vol. 2 *Inter-Regional and Inter-Ethnic Relations*, ed. by Anke von Kügelgen, Michael Kemper and Allen J. Frank (Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1998): 101–151.

1 参照)。さらに、3 点は、ハリーフア・ムハンマド・フサインの弟子、アブド・アルアズィーズ・マジュズーブ・ナマンガニー (d. 1856/57) を通じる (図 1: 文書 2、5、6)。マジュズーブ・ナマンガニーは、ムサー・ハーン・ダフベディーやその弟子たちの活動について詳述した聖者伝『マジュズーブ・ナマンガニー伝』の著者でもあり、当時の有力な指導者の一人であった。コーカンドの文人列伝『カイユーム伝』によると、彼は多くの弟子を指導しており、彼に従う者は「マジュズービー」と呼ばれたという。また 1 点は、マジュズーブ・ナマンガニーが、ナマンガンにおいてコーカンド・ハーンの宮廷で活動する何人かの指導者にも師事したと述べている (図 1: 文書 6)。

これらのことから、ムジャッディディーヤのフェルガナ盆地への伝搬にはハリーフア・ムハンマド・フサインが大きな役割を担ったこと、その最有力の後継者がマジュズーブ・ナマンガニーであったこと、当時ナマンガンにはコーカンド・ハーン国中枢に近い有力なシャイフたちのグループが出現しており、マジュズーブ・ナマンガニーもその活動に参加していたことが明らかとなった。

図 1



IV. マジュズーブ・ナマンガーニーとその教団（川本）

第一回ウズベキスタン調査において、2014年9月17日コーカンド市のハキーム・ハリーフア Hakīm Khalīfa 廟を訪れ子孫へのインタビューをおこなった際、ハキーム・ハリーフアの師のマジュズーブ・ナマンガーニーの墓廟がナマンガンにあり、ナマンガンにはマジュズーブ・ナマンガーニーの子孫が現在でも住んでいるという情報を得た。

その情報をもとに2015年9月に調査を行い（I.3参照）、主に、タシュケントにおいてマジュズーブ・ナマンガーニーの7代目の子孫アフマド・ムハンマド氏⁽¹¹⁾、ナマンガンにおいてマジュズーブ・ナマンガーニーの孫アターウッラーフ・ハーン・トラの5代目の子孫の同名のアターウッラーフ・ハーン・ママジョノフ氏⁽¹²⁾、アフマド・ムハンマド氏の妹の夫の兄ダウトハーン氏⁽¹³⁾からマジュズーブ・ナマンガーニーおよびその教団についての情報を得ることができた。

1. マジュズーブ・ナマンガーニーとナマンガンの教団

マジュズーブ・ナマンガーニーの出身地については諸説あるが、ジュラボエフ氏によればマジュズーブ・ナマンガーニーはコーカンド出身でコーカンドの喧噪を嫌ってナマンガンに移住しそこで多くの弟子を育てた。彼は4つのタリーカを継承したという。4つとはナクシュバンディー、カーディリー、イシュキー、マラーマティー（?）という。ダウトハーン氏によれば、彼の父の名はハリーフア・アブド・アッラフマーンである。アターウッラーフ・ハーン・ママジョノフ氏によると、マジュズーブという名は渾名であり、師のムハンマド・フサインが灌溉用の水路を渡っている時に、「おお、マジュズーブよ」と彼に呼びかけたことによっているという。

⁽¹¹⁾ マジュズーブ・ナマンガーニーには男2人女1人の子供がいて、アフマド・ムハンマド氏はその長男の系統である。ナマンガン市のマジュズーブ・ナマンガーニー街（マハツラ）に住んでいたが、2002～3年ごろにタシュケントに引っ越してきた。マジュズーブ・ナマンガーニーに関する文書を所有しているとのことであったが見せていただくことはできなかった。

⁽¹²⁾ アフマド・ムハンマド氏は父方の伯父である。彼はナマンガンの大学でマジュズーブ・ナマンガーニーについての修士論文を書いており、それを見ながら話してくれた。近親者の話をもとに書いているようであるが、伯父のアフマド・ムハンマド氏のもつという文書をみている可能性も否定できない。

⁽¹³⁾ アフマド・ムハンマド氏によれば、現在マジュズーブ・ナマンガーニーの廟を管理しているのは彼であり、彼はナマンガンではズィクルの指導も行っているという。後に、われわれのインタビューに対して、彼自身、自称ホージャかつトラであり、それはサイドのことであり、自分はマブドゥーミ・アアザムに連なるサイドであり、しかもアーファーク・ホージャの子孫であるという。また、彼はカーディリーヤ教団に属し、実際カーディリーヤのズィクルの指導をおこなっているという。

いつからナマンガンにおいてムジャッディディヤーとしての活動をはじめたのかは不明であるが、ナマンガン市の現在のムッラー・キルギス・マドラサの場所にハーナカーフと邸宅を持ち、そこで多くの弟子を教導した⁽¹⁴⁾。

息子（長男）のムッラー・アブー・アルカースィム・マフドゥーム Mullā Abū al-Qāsim Makhdhūm がナマンガンのハーナカーフを継承した。彼はメッカで亡くなりナマンガンには墓がない。

その息子がアターウッラーフ・ハーン・トラ 'Atāullāh Khān Tūra で、現在のムッラー・キルギス・マドラサの敷地内にあるグンバズ・マスジド Gunbaz Masjidi は、彼が 1917 年に建設したものであり、その側面にハーナカーフがあった。ハーナカーフではスフバトが行われていたという。アターウッラーフ・ハーン・トラは少なくとも 100 人以上のムリードを持ち、その子孫から子孫へと受けつがれたムリードが今もいるという。20 世紀の初めにはマジズーブ・ナマンガニーの子孫の率いる教団がナマンガンに存続していた。

ハーナカーフがあった現在のムッラー・キルギス・マドラサの敷地にワイン工場ができるまでは、マドラサの敷地内の樅の木の上にマジズーブ・ナマンガニーの墓はあったという。ナマンガン市の北側に広がる墓地にある現在の廟に彼の墓が移されたのはそのワイン工場が建てられた時と推定される。現在のマジズーブ・ナマンガニーの墓の傍らにあるアターウッラーフ・ハーン・トラの墓も、もともとどこにあったかはわからない。ハーナカーフがあった敷地にワイン工場が建てられるまでのソヴィエト時代の教団としての活動は不明。

2. ハキーム・ハリーフアの教団

マジズーブ・ナマンガニーには二人の有名な弟子がおり、その一人がハキーム・ハリーフアで、もう一人が長男のアブー・アルカースィムであった。ハキーム・ハリーフアの名前はアブド・アルハキーム・ハリーフア・イシャーン・コーカンドイーという。ハキーム・ハリーフアが一番弟子とされ、マジズーブ・ナマンガニーに 40 年間奉仕したあと、コーカンドに帰り教団活動をはじめた。彼の教団が広がったのは、コーカンド・ハーン国君主に認められたからであり、彼がナマンガンから首都であるコーカンドに帰ってきて後、コーカンド・ハーンのフダーヤル・ハーンが彼に敬意を表してモスクを建てたという⁽¹⁵⁾。

⁽¹⁴⁾ 現在のムッラー・キルギス・マドラサ北西側の街区は、マジズーブ・ナマンガニー街（マハツラ）またはマジズーブ・ナマンガニー通り（コーチャ）と呼ばれている。

⁽¹⁵⁾ 2014 年 9 月 17 日コーカンド市のハキーム・ハリーフア廟の前の子孫たちの邸宅において、ハキーム・ハリーフアの孫にインタビューした。「祖父、ハキーム・ハリーフアはマジズーブ・ナマンガニーに 40 年仕えた。そして四つのスルークのムラッハスになった。ナクシュバンディー、イシュキー（チシュティーという説もある）、カー

ハキーム・ハリーフアには有名な弟子が V で紹介されるハズィーニーを含め 4 人いたという。ハズィーニーは 4 人の弟子の中で最後の弟子である。ジュラボエフ氏によればハズィーニーを含めて、19 世紀前半にコーカンド近郊でタサウフ・イルハーニー・ディーワーンとよばれる新しい文学スクールができ、新しいタサウフ文学が興隆した。ハズィーニーはカーディリーヤとも称し、師のハキーム・ハリーフアとアズィーム・ホージャ・イシャーンと共にフェルガナでナクシュバンディーヤとカーディリーヤの混合したズィクルを行っていた⁽¹⁶⁾。

V. ハズィーニー研究事始め：カッタ・ケナガス村をたずねて（和崎）

コーカンド近郊（現フェルガナ州ウチュ・コプリク地区）のカッタ・ケナガス村出身のハズィーニー（1867-1923）は、19 世紀おわりから 20 世紀はじめにかけて、フェルガナ盆地を中心に、とくに詩人として名を馳せたスーフィー導師である。本報告では、彼の人物像と活動、そして帝政ロシア・ソ連時代初期における国家権力との関係について、主に河原弥生氏⁽¹⁷⁾とオタバク・ジュラボエフ氏⁽¹⁸⁾の先行研究に基づいて説明することを目的とした。ただ

ディリー、ジャフリーである。この地に戻ってきてから多くの人が弟子入りした。4 人の息子がいた。その一人である私の父はパキスタンで死んだ。

「祖父からも父からも直接話を聞いたことはない（他界していたため）。祖父の修行場は今の住居からは少し離れたところにあった。その周囲の土地も所有していた。ソ連時代に修行場は接収され、工場か何かに変わった。近所の男性たちは祖父の弟子だったので、幼い頃から祖父の話を聞かされ、行われていたズィクルの集会の話も聞いている」。

⁽¹⁶⁾ オスタナクロフは「(マジュズーブ・ナマンガーニーの弟子の) ハキーム・ハリーフアは、初めは「沈黙のズィクル」を行っていたが、[カーディリー教団の始祖] アブド・アルカーディル・ジラーニー (d.1166) が自分のタリーカを特徴づける声を出すズィクルを行うようにと彼に命じた夢を二度見た後、声を出すズィクルを行っていた」と述べている [Ostonaqulov, Ikromiddin, Histoire orale et Littérature chez les shaykhs Qâdirî du Fergana aux XIXe et XXe siècles, *Journal of the History of Sufism*, 1-2, 2000: 522-23,526]。河原は、ハズィーニーについて、カユミーのフェルガナ盆地の詩人傳 [Po'lotjon Domulla Qayyumov, *Tazkirai Qayyumi*, Toshkent: O'zRFA Qo'lyozmalar instituti nashriyot bo'limi, 1998: 562-63] を典拠として、「20 世紀初めの有名なスーフィー詩人のディヤー・アッディーン・ハズィーニー（1867-1923）は、カーディリーヤの「教導の免許」を [師のコーカンドの] ハキーム・ハリーフアから得て、声を出すズィクルを行っており、彼の詩のなかで自分のタリーカをカーディリーヤと称していた」とする [Kawahara (2015) : 153]。

⁽¹⁷⁾ 河原弥生「コーカンド・ハーン国期フェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤの発展」『内陸アジア史研究』25、2010: 31-54; Kawahara (2015)。

⁽¹⁸⁾ Жўрабоев, Отабек. Ҳазиний Тўра // Тошкент, Ўзбекистон Республикаси Фанлар академияси «Фан»

し、以下のハズィーニーをめぐる歴史的な記述は後者の先行研究にのみ依拠している。また、本報告では、ウズベキスタンにおけるハズィーニーの現代的意義についても考察を試みた。

ハズィーニーの出自は、アリーとファーティマの子のフサインに遡るサイド家系、そして預言者の父方オジのアッパースにまで遡る家系であると同時に、ナクシュバンディディー・ムジャッディディーヤの導師にも連なる家系である。しかし、ハズィーニーの詩のなかには、彼の帰属意識がナクシュバンディディー・ムジャッディディーヤだけでなくカーディリーヤにもあることを謳うものが数多くあり、彼のなかでふたつのスーフィー教団は不可分に結合していた。彼が楽器演奏をともなう声高のズィクルを好んだこともよく知られている。彼の詩は、コーカンドやサイラム、ホジャンド、タシュケントなどのハーフィズによって曲づけされ、スーフィー詩人の詩を謳い聴く集い（以下、これを便宜的に「スーフィー詩人の調べ」と記す）で楽器演奏とともに朗詠された。19世紀後半になると、ハズィーニーは、自らの詩のなかで、トルキスタン総督府の植民地政策やムスリム世界内部の腐敗を強く批判するようになる。このことによって、彼の詩はムスリム民衆に大きな人気を博し、彼の教団支部は一大勢力へと成長した。しかし同時に、彼は、ドゥクチ・イシャーンが先導した民衆蜂起に警戒を強めたトルキスタン総督府によって厳しい監視下に置かれるようになり、そうした状況のなか、1923年に故郷のカッタ・ケナガス村で他界した。彼には多くの弟子がいたが、1917年の革命後、彼らの活動は、政府の弾圧によって壊滅的な打撃を受け、「スーフィー詩人の調べ」とともに、社会の表舞台から姿を消していった。1940年代になると、ハズィーニーに連なる教団支部の活動はほぼ完全に停止するに至った。

しかし、カッタ・ケナガス村のハズィーニー廟とハーナカーフはソ連時代をとおして密かに参詣の対象とされた⁽¹⁹⁾。そして、それらは独立後に国の文化財保護指定を受けるようになり、1992年には「ハズィーニー」郷土史博物館も同村に開設された。さらに、ハズィーニーの詩も、「スーフィー詩人の調べ」が（おそらくは独立前後から）社会の表舞台で再び行われ始めると、名実ともに復権した⁽²⁰⁾。なぜなら、カッタ・ケナガス村近郊の（フェルガナ州）ブヴァイダ地区アク・コルガン村に活動拠点を置いた導師イブラーヒーム・ママトクロフが率いたナクシュバンディディー・ムジャッディディーヤの「ライラ・アル＝カドル」(qadr kechasi: 定命の夜、御稜威の夜)の大集会において、ハズィーニーの詩は、アフマド・ヤサヴィーやマジズーブ・ナマンガーニーらの詩とともに、ハーフィズによって朗詠されるよ

нашриёти, 2007; Ўша муаллиф. Ҳазиний - Девон // Тошкент, “TAMADDUN” МЧЖ, 2007.

⁽¹⁹⁾ 2016年3月5日、タシュケント市のウズベキスタン共和国科学アカデミー文学博物館において、オタベク・ジュラボエフ氏にインタビューした。

⁽²⁰⁾ 2015年8月28日、ナマンガン州チュスト地区チュスト市において、導師イブラーヒーム・ママトクロフのムリードたちにインタビューした。

うになったからである⁽²¹⁾。しかし、導師イブラーヒーム・ママトクロフが2009年に他界してから、ウズベキスタンでは、ハズィーニーの詩の朗詠は、諸々の理由から、「スーフィー詩人の調べ」とともに、再び社会の表舞台から姿を消したことも最後に指摘した⁽²²⁾。

謝辞

タシュケント、ナマンガン、カッタ・ケナガス村の調査に際しては、ウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史学研究所教授アドハム・アシロフ先生より多大なご支援を賜った。先生ご自身の運転でフェルガナ盆地にお連れいただいたのみならず、そのご人脈によって、マジューズ・ナマンガーニーの子孫たちや縁者たち、ハズィーニーの子孫たちとの面談など、われわれ日本人の調査者だけではとうてい不可能な調査も可能となった。アシロフ先生にはこの場を借りて再度お礼を申し上げたい。また、アシロフ先生のご紹介により、ウズベキスタン共和国科学アカデミー文学博物館研究員オタバク・ジュラボエフ先生、ナマンガン大学のムーミンジョン・スライモノフ先生（文学史）からも多くの貴重な情報を提供していただいた。各位にたいしても深く謝意を表したい。

（奈良学園大学）
（東京大学）
（中部大学）

⁽²¹⁾ 2008年9月28日、フェルガナ州ブヴァイダ地区アク・コルガン村のシャー・ナクシュバンディー・モスク（当時。現在はサルマンガト・モスクに改称）で催された数千人規模のライラ・アル＝カドルの大集会において、彼らの詩が朗詠されるその様子を映像撮影した。

⁽²²⁾ このことについては、2006年末から2015年までのウズベキスタンにおける報告者の継続的なフィールド・ワークによる見聞に依拠する。